
妖説話~The Dragon Which Attracts A Person~

アマノアキマサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖説話~The Dragon Which Attracts
A Person~

【Nコード】

N6252W

【作者名】

アマノアキマサ

【あらすじ】

異境都学園という学校がある。この学園は異能者専門の学校である。その学園の一部の生徒たちの物語。

プロローグ「夢で見てしまった過去」(前書き)

この物語はもちろんフィクションです。

プロローグ「夢で見てしまった過去」

……得体の知れないものが目の前にいる。僕の目の前に。

気味が悪いうめき声をあげている『それ』は、見ているだけで人を不快にしてくれる。

だけど、僕は『それ』に手を伸ばし……ためらいなく口に運ぶ。

もちろん、食べるために。

でも、これはいつものこと。僕が背負った宿命であり、この世で一番幸福なこと。

『それ』らはおいしいのだ。僕にとって。

だが、今日の『それ』は違った。

……血、血なまぐさい。まずい。見た目だけでなく味まで人を不快にするのか。

あまりの不味さにもだえ苦しんでいると、頭に声が響いてきた。

これまた不快な声。人をあざけるような笑い声。

そしてこの声は不可解でもあった。僕の声だ。

なんで？と思ったが、すぐ気がついた。『意識^{げんじつ}』の外から聞こえるのだと。

だから、僕は目を開けてしまった。だから、僕は見てしまった。

僕が同僚を殺し、嘲笑^{わらって}しているのを。

プロローグ「夢で見てしまった過去」(後書き)

これも週一が目標です

龍―？（前書き）

登場人物¹

いちじょうりゆうや

一条龍哉 男 15才 12月7日生

身長175cm

体重60kg

異境都学園中央校高等部妖人科1年B組所属

特能〈呪詛^{スキル}〉

種族 妖人（正体不明）

水系の魔法が得意

得物は異刀《球沈め》

龍――？

「龍哉様。お元気がありませんが、どこか具合でもお悪いんですか？」

「いや。いたって健康だが……そんなに調子悪そうに見えたのか？」

「はい。少しお暗いので」

「暗い……か。まあ、テンションは低いからそう見えても不思議じゃないか」

心配されないようにいつもの自分を演じていたつもりだったんだが、（俺に対してのみ）観察力の高い奈々にはどうやら無駄だったらしい。

「昔の嫌な思い出を夢で見ちまったんだよ、今朝」

「どんな夢だったんですか」

「……………」

よし、唐突だがここでこのデリカシーのない童顔の女を紹介しよう。
いさかいみや
異境都学園中央校高等部魔術科一年の落合奈々である。
髪と目の色は水色で、顔に似合わない大きな胸の持ち主の美少女である。

だがしかし、こいつがかわいいのは今はどうだっていい。

こいつのプロフィールで今重要なのは、完全な日本人であるということだ。

‘嫌な’という単語の意味を知らないわけがないのだ！

もう少し気を使え、気を。

そんなんだから俺とあいつ以外に友達ができなかったんだよ。

「何か失礼なことをお考えになさっていませんか。龍哉様」

小説なんか読んでいるとたまに主人公の考えていることが他人にバレちゃってるみたいな展開があるが、どうしてわかるのだろう。そもそも――

「人のこと無視しないでください！私は放置プレイでこうするような変態さんではありませんよ！」

人の思考の邪魔しないでほしいな。そうだ！

「いや、客観的にみたありのままの事実だから」

「はい？何をおっしゃっておられるのですか？言葉のキャッチボールが成り立っていないのですが……」

「いやいや似たようなものだろ」

「ですから！何をおっしゃってお――」

「なんとなくおまえの発言に対しての返答を一つずつずらしてみただが？」

「――ッ!？」

自分がからかわれているのに気づいた奈々は顔を赤らめた。理由は

「龍哉様にいじめられると私はとっても気持ちが高揚するのですが……。これは恋なのでしょうか？」

「たぶん、いや間違いなく異常な性癖だ」

こうやって自分が異常であることを論してやろうと日々努力しているのだが、どうも効果がないようだから話題を変えよ。

「そういえば制服改造したんだよな、ゴスロリに。自分でやったのか？」

「はい。あとこれはロリータです。龍哉様は改造なさってないですよね？何を武装なさっているのですか？」

「《珠沈め》っていう“異”の称号を持った刀だ」

「伊藤ですか」

「異刀だ。漢字が違うぞ」

今日から俺たちが通うことになる異境都学園の中央校はほかの分校と比べると変わった校則が多い。その一つに制服の改造または称号を持った物（特に武器）の携帯が義務付けられているというものがある。俺はこれが気になったので清明きよあきに聞いてみたところ。

『個性が特異能力の成長のカギになるからだよ』

という個性の主張が目的です！みたいな返事が返ってきたので、私服でいいじゃんかと突っ込むと、

『一応教育機関がっこうだから』

と返してきた。なんだよそれ。

「着きましたよ、龍哉様。クラス分け見に行きましょう」

「そうだな。うわぁ！人多い！たく、クラス分け表ぐらい寮に送ってこいよ。妖人科は……左端だな。確認し終わったら声掛けてくれ」

奈々と別れた俺は、妖人科のクラスA，B，C組の中から自分の名前を探す。こういうとき一条という名字はとても便利だ。なにしろ上のほうにあるんだ。すぐ見つかる……ほらあった。B組の4番だ。ついでに旧友の名前も発見した。

事は済んだし、さっさとこの人ごみから離れよう。

「龍哉様」

と、俺が人ごみから抜けだした直後に奈々が声をかけてきた。

「意外と早かったな。もう少しかかると思ってたぞ。お前、ウォーリーを探せとか苦手だし」

「人の名前をあの紅白のしましま男と一緒にしないで頂けますか。そんなことより何組でしたか？私はD組でした」

「B組だったが聞いたってどうにもならんぞ。校舎違うし、昇降口

も違うし」

「へえ？」

「なんだ、知らなかったのか。ここは学科ごとに別々の校舎があるんだよ。連絡通路はあるがな」

「そうでしたか………知りませんでした」

どうしてここまでへこむんだろうか。てか、自分の通うところぐらい調べとけよ。

「じゃ、俺もう教室行くから。また帰りにな」

「！はい！また帰りに！」

今度はとてもご機嫌だ。感情の起伏が激しいやつだ。

俺は奈々に見送られながら自分の教室へと向かった。

しかし、久しぶりにあいつに会えるのか。少し楽しみだな。

今、登校中よりはるかにテンションが高くなっている俺は、第三者からみれば奈々のこと言えない感情の起伏が激しい奴だろう。

龍―？（後書き）

こっちのほうが真作です

響ー？（前書き）

登場人物 2

おちあいなな

落合奈々 女 15才 1月19日生

身長159cm

体重43kg

異境都学園中央校高等部魔術科1年D組所属

特能〈雷法〉
エレキトリック

種族 魔術師

電気系の魔法が得意

響ー？

みなさん。おはようございます。そしてはじめまして。

私は泉響子といいます。

身長167？

体重45？

スリーサイズ秘密

平熱33.5℃の女の子です。

私のプロフィールに疑問を持った方もおられるでしょうが、それは置いておいてください。

では、みなさん。自己紹介を終えたところで質問します。

『超人が実際にいたらどう思いますか？』

なぜこんなことをきくのかって？

そんなこと決まっています。私たちの世界にその超人がいるからです。しかもかなりの数いるのです。

この世界では超人は異能者と呼ばれており、社会に必要とされています。

その理由は、化け物がいるからです。

普通の人から見て異能者は化け物じみているかもしれませんが、その化け物たちは異能者からみても化物です。

そんな化け物たちは人を襲うので、化け物じみた者たちが退治しなければなりません。

だからこの世界にはミスティックスクールと呼ばれる異能者専門の訓練学校があります。

日本におけるそれは異境都学園です。

総生徒数1万人超の大規模な教育機関であり、人口1万人超の都市でもあり、異能者を閉じ込めておく大きな檻でもあります。

私はその檻の中で暮らしています。

そうです。私も異能者。

人竜 蛟で流一門のお荷物、泉家の一人娘。

しかし実力主義のこの学園では出身がどこかは何の意味も持たない。強い者が上だ。

まあ、裏を返せば自分がどんなに頑張っても泉の汚名は返上できたりしないのだ。

……なんか暗くなってきた（私が）ので、私は頬をたたき気合を入れる。

今日は4月7日始業式である。

明るくポジティブに、そうでないとこんなところではやっていけない。

7時30分に寮を出る。いつもよりは10分早い。だが同じ寮に住んでいる娘たちよりは遅かった。

別に遅刻しそうなわけではない。北校の娘たちが早すぎるのだ。私は偶然会った友達と話しながら学校に向かった。

私のその友達は超能力科なのでクラス表の前で別れ、私は妖人科の3クラスから自分の名前をさ——！！

自分の名前を探す前にぱっとある人物の名前が目に入ってきた。

（り、龍くんだ。）

一条龍哉。

北小での同級生で友達で、私の……思い人だ。

そしてその上に自分の名前があった。

私は教室へと足を向けた。

（龍くんの真ん前！はなせるのはうれしいけど近すぎる！授業ちゃんと聞けるかな………というか覚えてるかな私のこと）

と考えていると前方から大きな声が聞こえてきた。

「響ちゃ~~~~~~~~ん！！！」

姫ちゃんこと小田姫代。私の親友で1年にして生徒会書記である。元氣ハツラツ少女で、明るい娘。

「響ちゃん。響ちゃん。何組だった？ B組だったよね？ 龍くんも一緒だったよね？ うれしいよね？」

「知ってるなら聞かなくてもいいでしょ。ほら、仕事に戻った。いそがしいでしょ？」

「そうなんだよ。忙しいんだよ。じゃ私もB組だから！ また会おう！！」

会おう、といいきったと同時に姫ちゃんは走り去って行った。疾風のように。

（廊下を走るな、生徒会会計）

私はどうしようもない親友をどうやってしつけようかと考えながら教室に入り、自分の席のうしろで何らかを描いている男子に声をかけた。

「久しぶり、龍くん」

彼は声をかけられてやっと自分の前の席に人が座ったのに気づいたらしかった。

「響子。やっと来たか。ほんと久しぶりだな」

どうやら私のことおぼえていてくれたようだ。

「私がおんなじクラスだって知ってたの？」

「自分の名前の上下ぐらいは目に入るほうが普通だが？」

「そ、そうだよ。また1年間よろしくね！」

「ああ、よろしく頼むよ親友」

龍くんの中では私は親友だったらしい。

（親友って言われるのはうれしいけどなんかさみしいな。異性としてしてもらえてないような気がして）

「姫ちゃんもこのクラスだって」

「知ってる。さっき風のようにやってきて風のように帰っていったよ。相変わらずだな、あいつ」

「そうだね。姫ちゃんは変わんないね」

「お前も変わってないけど」

「龍くんだって変わってないよ」

「それもそうだな」と彼は笑い、私を笑った。

彼をみていると自然と笑顔になってしまう。私どんだけこの人のこと好きなんだろう？

「そういえば何描いてるの？」

「陣だよ。名前は……ジェットってところかな」

「？龍くん魔法使うの？特能何？」

「ひみつ」

「いや、シャンプーのCMみたいに言わないで教えてよ」

「ひみつ」

「……………」

教える気は全くないようだ。ちょうど担任となる先生が教室に入ってきたので、私は聞き出すのを中止にすることにした。
すごく気になるけど。

龍―? (前書き)

登場人物 3

いずみきょうこ

泉響子 女 15才 12月7日生

身長 167 cm

体重 45 kg

異境都学園中央校高等部妖人科1年B組所属

特能〈涙^{ヒール}〉

種族 人竜 蛟

剣術が得意

得物は退魔刀《維切》

龍―？

始業式はあっという間に終わった。

生徒より教師のほうが短気だからであろう。

おしゃべりをしたらどうなるのかわかっている生徒たちはただ静かに立っており、校長は手短に話し、教師陣も喧嘩にならないように口を開かないと通夜のようだった。

教室に並んで戻った俺たちを待っていたのは、テストだった。英語と数学と保健の三つだ。

簡単すぎて話にならないでテストで時間と紙がもったいないとしかいいようがなかった。

そしてただいまH R中。

担任の女教師が明日の予定について話している。

そんな中響子の奴はちらちらと後ろにいる俺のことをみてる。

たぶん今朝の質問に答えなかったからだろう。

まあ適当に答えておくか。どうせばれないし。

「一条。明日何時登校だ」

担任に訊かれてしまった。人の話を聞いてないと思われたのだろう。絶対、響子のほうが聞いてなかったと俺は思うがな。

「9時」

と、かえすと舌打ちしてやがる。いいのか教師がこんなので？

「よし、説明終わりだ。解散」

11時半ちょうどお昼時。どっかで食べて帰るかと考えていると、

「龍くん、一緒に帰らない？」

と、響子が声をかけてきて、

「龍くん、響ちゃん、ご飯を食べに行こうよ」

と、姫代はさも当たり前のように俺たちに大声をかけてきた。

声がでかすぎるだよ、お前。ほら、クラスの男子から恨めしそうな視線を感じるは。お前ら人気あるんだな。

っと、クラスの何人かと先生がビクツとなにかに反応した。すごいな、北校にはあれを感知できた奴はあいつしかいなかったのに。

怒気や殺気の量(?)を半分に分け、それぞれをぶつけて打ち消し、体外に放出する量をきわめて弱くする俺が創った魔法だ。

「俺は勉強できるのにアホな奴がきらいなんだよな」

俺はそうひとりごとを小さく呟いたつもりだったが、

姫代は「そうなの？」と小さな声でかえしてきた。

中央校って化け物揃いなのか？

そう思いながら俺は二人を置いて席をたち、廊下に出ると、

やはり笑顔の鬼がいた。

俺が今朝言った「また帰りに」は、教室まで来るんじゃないぞ、って意味だったのだが伝わらなかったらしい。

俺が昇降口前で待ってろよ、とツツコむ前に

「龍哉様はとってもおモテになりますね。万年モテ期ですか？この野郎」

「『様』付けしている相手にこの野郎とか言ってますよ。おかしいですよ、奈々さん」

「何を言ってるんだか。あなただって私のこと『さん』付けで呼んだことないじゃない、< r u b y > < r b > 龍君

< / r b > < r p > (< / r p > < r t > ・ < / r t > < r p >) < / r p > < / r u b y > 」

やった！奈々が俺に対して敬語使うのやめてくれた……………

……………現実逃避している場合でなかったな。

なにしろ奈々の周りにはバチバチと青白い光が現れている。こいつのそれはいろいろとまずい。

「龍くん。だれだれその子！もしかして、彼女？隅に置けないね」

「……………ッ!？」

そこにやってきた二人。

姫代は勝手な解釈をして意味深な笑顔を浮かべている。

響子は奈々の顔を見て泣きそうになっている。

（この二人の誤解を解きながら現象回避！できる！俺ならできる！はず……………ん？）

だが二人の登場だけで奈々の怒気はなくなっていた。

おかしいと思い、奈々のほうを見てみると、なぜか奈々は複雑そうな顔をしていた。

「奈々？」

「……龍哉様。そちらのお二人は？」

声色もどこか残念そうだった。

「ああ、俺の北小の頃からの友達でクラスメイトの小田姫代さんと泉響子さんだ。姫代、響子、この子は北中からの友達、落合奈々……だ」

「はじめまして、姫代だよ！よろしく！」

「はじめまして、泉響子です」

「お初にお目にかかります。落合奈々と申します。以後お見知り置きを……ところで龍哉様なぜ私だけ『ちゃん』づけなのですか？」

「あゝきこえてたんだ（棒読み）」

「私も聞こえた」

「？」

響子だけ、何の話？みたいな顔してたが放っておこう。
俺のセリフの『……』には『ちゃん』がはいる。
聞き取るなよ！

「なんか知らないけど、逆ギレはよくないよ？」

響子に冷静なツッコみをいれられてしまった。

「……響子がいると調子狂うな。どうしようかな、これから」

「そうですね。本来なら

『逆ギレですか!』

『別にお前が童顔なのと子供扱いしているのとは関係ないだからな
!』

『無視ですか!あとツンデレみたいの中に私を子供扱いしていると
いう聞き捨てならない事実が!』

『しまった!妹扱いの間違いだった!』

——のようなくだりからお二人に参加してただこうと思ってお
りました……響子さんが冷静すぎるのと、龍哉様が声の大きさ
をお間違えになったせいで続きませんでしたね」

「ええ、俺のせい?」

「はい」

「あははははは。ふたりとも面白い!いつもこんな感じなの?」

「まあ、まじめにやらなくてもいい時はこんな感じ」

「それより響子さんを混ぜたときにちゃんと回るように考えましょ
う」

「そうだな」

「私も混ぜて」

俺たちが今朝同様あほな会話をしている間、響子はぽかんとしてい

た。

なんかごめん。

龍―？（後書き）

改訂版！やっとかけましたよ！

響―？（前書き）

龍―？を10月23日に改定いたしました。

響―？

私なりに頑張ったのですが……結局ついていけませんでした、龍くんと奈々さんの乗りに。

私は姫ちゃんといえることが多いので、自分はノリがいいほうです。自称ではないですよ、みんなによく言われるんです。

その私がついていけなかった理由は一つです。

龍くんが変わったのに驚いたからです。

小学校の頃の龍くんは人づきあいの悪い子で、どこことなく人を避けている子でした。目立つのが嫌いな子でした。そんな彼が人前でコメントのようなやり取りをしたのです。

はっきりいって腰を抜かしそうでした。

そして現在は4人で下校中。みんな住んでる方向が同じなので誰かが遠回りするということはない。中央校には初等部――小学部が存在しない。だから在席していた分校がある地域に住むのが普通だ。ああ。すみません。異境都学園の説明をするのを忘れてました。

異境都学園。

日本に存在するミスティックスクールで、世界でも最大級の規模と在学者を誇る。

また、世界で初めて建設が決まった学校である。ちなみに完成、開校は一番じゃないそうです。

ミスティックスクールの中ではかなり変わっている。

ミスティックスクールはそれぞれ入学できる異能者の種類は決まっている。

また、一つの町であり、学生と教師はその町の寮で暮らすことが義務である。

入学できる種族が決まっているのは、同族のほうが教えるのに効率がいいのといざこざが起きにくいだろうと考えられているからだ。寮制のほうは怪物を監視するのに都合がいいからであり、そのため町の外に出るには事前に許可がいる。

だが、この学園は寮制のほうは変わりませんが、同じ敷地内に様々な異能者が住んでいる。

そのかわりに学校が五つに分かれていて、それぞれ特色がある。

私たちが通っている本校——中央校は、特異能力（通称、特能）と呼ばれている能力をもつ学生のみが在席できる。逆を言えば特能さえ持っていれば入れる学校だ。

目的は特能の解析。いわば、研究機関である。

それ以外の分校は、北が妖人、東が超能力者、西が魔術師を専門に育成しているが、種族重視のほかのミスティックスクールとは違い、才能さえあれば誰でも入れる。

南校は、魔具などのアイテムを作ったり直したりする工業的分野や普通でない生物について勉強できたりする。

だが、これは高等部（中央校は違う）からの話である。そのため、小学部、中学部は自分の希望する学校に入れる。だから奈々さんのように魔術師なのに北校に通っていた、ということもある。もっとも、そういう人は少ないらしいが。

なんだか長い説明になってしまいました。

では、この話は置いて、私には気になることがあります。

龍くんの変化と奈々さんについてです。

まあ、龍くんのほうはなんとなく予想がつきます。だって私は親友ですから、彼がどういう性格をしているのか知っています。

やさしくて社交的なのです、彼は。

だから北小時代に人を避けていたのには理由があり、その枷のようなものがなくなったからやりたいようにやれるようになった、と私

は考えています。

奈々さんのほうは
なんで奈々さんと龍くんの掛け合いがいつもこんな感じなんですか？
？というところでしょう。

私と響ちゃんは龍くんと仲良くなったきっかけは、ちょっとした事件があったからです。

彼の幼馴染である茉莉が言うには、龍くんとかわるにはイベントが必要だそうです。

だとすると、奈々さんも同じように事件に巻き込まれたか、事件を起こしているのでしょうか。

私が気にしているのはこの後です。

もし、その事件が龍くんの枷を外したとしたら？

もし、彼女が彼を解放したなら？

彼は彼女を特別視しているかもしれません。

だから、超気になります。

はっきり言って見た目で奈々さんに勝てる気がしません。

その上イベントが私より彼にとって印象深いものだったら、勝機はないでしょう。

今、ちょうど龍くんと姫ちゃんが話していて、奈々さん一人が離れている。質問するには好機だ。

「奈々さん」

「なんですか？響子さん？」

「あの龍くんとは—————」

「響子さんは龍哉様とはどういったお関係ですか？」

逆に質問されてしまった。

どうして今このタイミングで私に訊いてきたのかわからなかったが、私は「親友だよ」と答えた。

「懸想しているなら、しているとはっきり答えたらどうですか。私の聞き方もよくはなかったかもしれませんが」

「え…」

「あとついでに、龍哉様に見蕩れてはいませんか？」

「？」

どうということ？

「……………となりますと、響子さんは恋敵ですか。なかなか強敵ですね。ちなみにあなたがしようとしていらっしゃった質問ですが、龍哉様は私を特別視などされておられませんのでご安心を」

そういうと彼女は龍くんと姫ちゃんのほうに近づいて行った
見蕩れの意味は分からなかったが、まだ何とかかなりそうなのはわかったからよしとしよう。

「響ちゃん。お昼何がいい？」

姫ちゃんに声をかけられたので、三人に近づく。これからみんなでお昼を取ろうということになったので私にも聞いたらしい。
なんでもいいよと答えると、みんなそう言うのと姫ちゃんをあきれ、ファミレスにしようと提案し私たちを先導しだした。

「響子。奈々とは仲良くなれた？」

「どうかな」

「奈々は気難しいところもあるが、いい奴だと思っから、仲良くしてあげてくれ」

「うん。わかった」

龍くんに言われなくなっって仲良くするよ。

だって奈々さん、私の知らないこと知ってるみたいだから。私なんかで勝てるかな、奈々さんに。

響ー？（後書き）

会話をメインにして書こうと思ってのに…

奈々ー？（前書き）

下書きのストックがなくなってきた！

奈々―？

.....
.....。
.....。
.....？

なぜ私が語りなのですか？

へえ？

始業式の日、の昼間のアレについて説明しろ？
嫌ですよ。

龍哉様のことは龍哉様自身がお話しになられるはずですよ。

はい？

許可とおられるのですか？
だったらなぜあなたが書かないのですか？

忙しい？

編集作業で忙しい？

あゝ。

そうですね。

あなたが面倒くさがってやらないだけですわ。

嘘は言っていないですよ。

龍哉様も響子さんもついでに私も、字はきれいですし誤字もほとん

どしめんし、ね。

あ、ちよつと何をするのですか！
ちよ、やゝめ~~~~~！

◎しばらくお待ちください◎

すみません。

とあるよく逆ギレするツンデレでペツタンコなアバズレが私の部屋で暴れてくれたので、片付けるのに手間取ってしまいました。

.....何の話でしたか？

ああ、そうでした。

龍哉様のことでしたね。

龍哉様はとても魅力的な男性です。

話をしたことがある人間ならわかることですが、龍哉様は人たらしであります。

異性同性関係なく人に好かれます。

とても魅力的であるから、異性から好意を持たれることが多いです。厄介なことです。

ですが、異性としての好意には2種類あるのです。

ひとつ目が、私や響子さんのように龍哉様に惚れているタイプ。

ふたつ目は、龍哉様に見蕩れている——魅了されているタイプ。

この二つには、普通なら大きな差でないかもしれませんが。

しかし、龍哉様に対してとなると天と地、いいえマリアナ海溝チャレンジャー海淵の底と大気圏の外の外気圏くらいの差、といってもいいでしょう。

そのぐらい大きな差です。

なぜなら、龍哉様にはある呪いがかかっているからです。

『魅了』

人を虜にする呪いが。

龍哉様曰く、「自分にかかっているのはだいぶ弱いものではある」らしいです。

しかし、『魅了』そのものはとても強力な呪い。

いくら弱いほうといっても普通に生活しているだけで目立つ、と茉莉は言っていました。

目立つようなことはホントに嫌いだったのでね、と《氷姫》ひょうきは言っていました。

だから苦勞しているたんだよ、と龍哉様の弟分と妹分は言っていました。

これが龍哉様についての解説です。

満足しましたか？茉莉^{アバズレ}。

奈々ー？（後書き）

最後の一言見る限り茉莉ちゃんは編集してないですね。

響ー？（前書き）

新キャラ登場！？

響――？

「なんで聖佳までいるんだよ、泉先輩だけじゃなかったんですか」

「なにかな、その言い方！あたしは響子先輩の相方なんだよ！っていうか渡はいらないから帰んな！」

「二人とも落ち着いて」

現在AM2…30。廃校。

私は後輩の長いとも短いとも言えない中途半端の髪で私と同じくらいの背の少年の犬飼渡と、槍私より少し背の低い猫のような少女の猫丸聖佳という。

私は高一で二人は中三である。

なぜ私たちがこんな時間に外にいるかといわれると部活をしに来ている。

『特力会』

私たちはこの部活に所属している。

一般の部活と違ってスカウト制の上に理事長の許可がないと入れない部活である。

活動内容は私たちがここにすることから察してほしいが一応説明しておく。

深夜に廃校を二人以上で警備すること、ただそれだけ。昼間にやることはない。

今日は欠番が出たので私たち三人がかりだされた。

ちなみに渡くんは傀儡師妖使いの犬使い、聖佳ちゃん**は**妖人の化猫である。

二人は幼馴染らしく普段は仲がいいのだが……………。

「あなたとはいずれ決着つけなくてはいけなかったので今つけるよ！」

「上等だ！！表出ろ！」

今日は何だがもめている。

「やめなさいって。というよりこの表ってどこ？中央校？」

「な、なんか言ってみただけです！」

「……………だっさ」

「なんだと！」

「二人ともいいかげんにしなさい！」

「……………」

二人とも黙ってしまった。少し強すぎたかな？

「けんかしてたらこの部活の意味がないでしょ。クラスはどう？」

「問題ないです」

「わたしもです」

「クラス編成には問題ないのに何で二人とも機嫌悪いの？」

「だって、聖佳が——ッ!？」

渡くんが説明しようとしたとき、彼は『何か』に反応した。もちろん私も聖佳ちゃんも『何か』の存在を感じ取った。

「行きますか？先輩」

「当り前よ。聖佳ちゃん敵は？」

「北側ですね」

「そう、渡くん聖佳ちゃんいくよ」

「了解」

わたしたちは敵のいるところへ目指していった。

「なんだ人間。邪魔するな」

私たちが『廃校』の北側につくとそこに妖怪がいた。

「鎌鼬………。しかも三体も」

「…………渡くん。学校側に連絡。援軍要請。聖佳ちゃんは私と一緒に」

「了解」

私と聖佳ちゃんは駆け出し人童態、妖人態に変化し鎌鼬と交戦を開始する。妖怪との近接格闘は危険だが、人童や妖人はこの手の戦闘のほうが得意だ。

なぜなら人竜や妖人は、妖怪の血をひいているからだ。

そのため運動神経や格闘能力、戦闘におけるセンスが常人や魔術師などよりはるかに高く、怪我の治りも早い。

といっても妖怪に対抗できるだけの力があるというだけで、退治するという能力は魔術師たちよりかなり劣っている。

だから“退魔”などの称号を持った武器を使う。

聖佳ちゃんは退魔槍 《ウェストン》、私は退魔刀《維切》を得物としている。

「なんだ！この猫耳女速いぞ！」

「あたしは猫なんだよ！」

聖佳ちゃんは槍を支えとして両足蹴りを入れる。だが、

「あれ、切れてる……？」

「聖佳！鎌鼬は風使い、風の刃で人を斬る！素手でやるな！」

「わかった」

渡くんの指示により彼女は槍での攻撃に切り替えた。

連絡を終えた渡くんも狗神を出して加勢する。だが、

「あんたの犬、邪魔よ！先輩のほうに加勢しなさい！」

「うるさい。先輩よりお前のほうが弱いだろ！！」

今日に限って仲が悪かったのだ。

それは戦闘においては命取り。

「スキあり」

バシユッ

「聖佳（ちゃん）！！」

彼女は斬られてしまった。

「クッ!？」

私は相手していた鎌鼬二体を水弾でふっ飛ばし、彼女のもとへ駆け寄る。

彼女を斬った鎌鼬はふっ飛ばされた二体のもとへ行き、みんなして逃げて行った。

「こら待て！追え！」

渡くんはかなり狼狽していたが狗神にあとを追わせた。

「聖佳ちゃん！」

「せ、先っ……輩……」

「しゃべっちゃだめ！」

かなり傷が深かった。妖人はけがの治りが早いといったが限度がある。このままほっておいたら死んでしまう。

私は泣いた。彼女が重傷を負ったからではない。彼女の傷をいやすために泣いた。涙を流した。

涙の落ちたところが治っていく。

これが私の特能〈涙^{ヒール}〉。あらゆる外傷や毒を治したりむいたりする力のある涙を流す能力。あまり強い効力は持たないが応急処置としては有効だ。だが失った血まで元には戻せない。彼女は危険な状態だ。

「渡くん。狗神を引かして私たちの周りも守って」

「で、でも」

「聖佳ちゃん守ることのほうが重要」

「は、はい」

彼が狗神を集めた数分後、応援が駆けつけた。

翌日の放課後

「元氣ないな、響子。目の前であからさまな落ち込みをみて見ぬふりは一日が限界なので言いたくなくても話せ」

龍くんに心配されていた。『特力会』の存在は中央校に中等部からいる者はみな知っているから、話してもいいが、私の失敗である昨日のことは話したくない。ごまかして逃げよ。

「ちょっと朝から体調が悪いの。だから一緒に寄り道できないから、じゃーね」

私は何食わぬ顔で席を立ち帰ろうとした。
だが、龍くんは腕を掴まれた。

「話せて言ってるだよ。逃げんな」

「――ッ!？」

私は驚いてしまった。いや、気押されてしまったのか。

昨日の夜、私は二人の喧嘩を止めるために『蛇睨み』という技を使った。この技は相手の思考を停止させることができる蛇の技。

龍くんは蛇の妖人？

「黙ってんなよ。親友だろ？それと一人で抱え込むな」

「あ、ありがとう」

龍くんの目には強い意志が込められていた。

龍くんはやさしい。たぶん、抱え込んだ結果の最悪な事態を避けようとしたのだろう。

私は龍くんに相談することにした。

龍―？（前書き）

久々投かん

龍―？

「特力会？」

「そう。正式には特異能力研究会。その名の通り、特能も研究するための部活動で現在は三つに分かれて活動している」

俺は響子から話を聞いていた。俺たち以外誰もいない。奈々にも先に帰ってもらった。

俺はこの学園の『施設』で育ったから裏のことはいろいろ知っているが、特力会については初耳だ。なぜ清明きよあきと茉莉は何も教えてくれなかったのだろう。

「でもそれは表向き。実際にやっているのは戦闘」

「？何と戦っているんだ？」

「もちろん、妖怪とだよ」

「はあ？」

この学園には実戦教育として高2の夏から一般や政府からの駆除、退治依頼が受けられるようになっていて。また高3ではそれらの依頼を受けないと単位がもらえないようにもなっている。

早くから実戦をしたいという奴も少なくはないのでそのため制度もあるが、その制度の中には『特力会』という名前は無い。だから実際に妖怪と戦う部活などは存在しないはずだ。

「特力会は『廃校』と呼ばれている場所の夜間警備を行っているの」

「『廃校』ってどこにあるんだよ」

「中央校にはそこへつながっている扉があるんだよ」

「中央校にそんな秘密の扉があったのか」

「うん。それで――」

「その『廃校』とやらにはなぜか妖怪が現れるので退治すると」

「そんなところだよ」

「で、お前はなんかミスちゃったんだな」

「うん。私がしっかりしてなかったから。後輩が怪我しちゃって」

自分のせいで他人が傷ついた……ね。こういうのはどうアドバイスすべきか。

彼女の落ち込んだ姿をみた俺はそう考えながら黙ってしまっていた。そんな様子をみて何を思ったのか響子は立ち上がった。

「ごめんね。こんな話して。あと昨日逃がしちゃってるから。今夜もあるの。だからもう帰るね」

彼女はそう言って帰ろうとするので一つ尋ねてみた。

「その後輩って誰？」

なんだか聞いてみたかった。もしかすると清明や茉莉が黙ってた理由のヒントになるかもしれないからだ。

「聖佳。中3の猫丸聖佳ちゃんって子だよ」

響子は俺に背を向けたままそう言い、教室から出て行った。彼女の声には後悔と怒りがにじみ出ていた。

「……………」

俺は数分黙っていたがもうあたりに誰もいないこと特に響子がいな
いことを確認してから口を開いた。

「…………だから黙っていやがったのか。何考えてんだか、あいつら」

俺はケータイを取り出しある番号にかける。去年の秋からかかってこ
ない番号だ。どんだけ後ろめたく思ってたんだか、俺は気にしてな
いのに。

『プルルルウウウ、プルルルウウウ、プルルルウウウ、な、
なによ』

ちゃんと出ただけえらいか。

「『アレ』がある武器庫の場所と『廃校』への入り口を教えろ」

『な！？だ、誰からそれ聞いたの！』

「いいから黙って教えろ」

『……………』

かなり長めの沈黙だった。付き合いは奈々や響子より長いからこれから何しようとしているのか分かっているからだろう。

『アレは————にある。扉は————に』

彼女からやつと答えが返ってきた。

「あんがと。あと去年のことは気にすんな。むしろ俺は感謝してるから」

『気をつけてね、龍哉』

彼女はそう心配そうに言い電話を切った。まったく神経使いすぎなんだよ、もう少し気楽に接してもらえんものかね。

俺はそう思いながら席を立ち帰路に就く。

「どいつもこいつもいつからそんな他人行事になったんだか。みっずくさ」

俺はまずアレのある武器庫へと足を運んだ。

「ここか」

「どうかしましたか？」

俺のことを不審に思ったのか警備員が近づいてきた。これは好都合。

五時間後その警備員がトイレで眠っているのが発見された。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6252w/>

妖説話~The Dragon Which Attracts A Person~

2011年12月3日20時49分発行